

安達正浩作 「落ちこぼれ」

- 全員 (教室のガヤ)
- 先生 こら、お前ら少しうるさいぞ。何をさっきから話してるんだ？ ほかの勉強しようとしている生徒の邪魔になるから、いなくていいから出ていきなさい！ えー、それでだ、この式はこう変形できるから、前のAの式と連立させて、解を求めればいいわけだな。
- 加藤久志 (小声で) (FI) ほら、間には漫画。
- 北川潤 (小声で) そうだろうなあ。どうせそんなことだろうと思ったけど、まあおれたちみたいに卒業したら就職する生徒には、授業なんか関係ないのさ。
- 水野孝夫 (小声で) どうでもいいさ。だけどこのクラスはひどいよ。授業聞ってるやつなんかほとんどいないもんな。
- 北川 (小声で) ほんとほんと。
- 水野 (小声で) ところで今晚どうする？
- 北川 (小声で) どうするかなあ。港のさ、埠頭の道路、あそこ最高じゃない？ 広いし、まっすぐだし。おまけにお巡りもいねえからさ。
- 水野 (小声で) そうだな。今晚は港にしようか。加藤、いいだろ？ おい。なんだ、寝てるのか。
- 先生 おい、その辺、授業の邪魔だ。しゃべるなら外に出ていきなさい。
- 水野 「はいはい」と。関係ないね。さーて寝るかな。お休みなさい。
- ナレーション 加藤久志は、青春高校の3年生。彼のクラスは受験を控えているにもかかわらず、大変騒がしく、とても勉強できる状態ではありませんでした。また、先生のほうも、できる者に合わせて授業を進めていったため、次第についていけなくなった生徒は、一人、また一人と落ちこぼれて、非行や暴走に走っていくのでした。その一人、加藤君もそのようなクラスの雰囲気、だんだんのめり込んでしまい、2年の時の親友たちと、暴走するようになっていました。
- 効果音 (終業のチャイム)
- 水野 あ～あ、もう終わったのか。それにしてもよく寝たな。なんとなく、このごろおれ、学校に寝に来てるみたいだな。
- 北川 どうでもいいさ。卒業したら食うために汗水たらして働かなきゃなんないんだからな。学校にいる間ぐらい、遊ばなきゃ。おい、加藤、お前このごろイヤに元気がないな。どうかしたのか？
- 加藤久志 いや、別に。なんでもないよ。
- 水野 今日は港に行くことにしたんだ。いつものディスコで、9時な。じゃあな。
- 加藤 ああ。(モノローグ) ほんとにおれ、毎日こんなことしていいのかな。でも今更勉強するって言ったって、全く分かんないし。いいさ、どうでもいいよな。水野だって、北川だっているし、おれみたいのだっていっぱいいるんだからな。よーし、今晚はブッ飛ばすぞ。
- 効果音 (バイクをふかし発車する音)
- 音楽 (ディスコ音楽)
- ナレーション 加藤君は、自分がほかの人たちからどんどん取り残されていくような、孤独感を感じていました。しかし彼はそれをどうすることもできず、それを忘れようと、同じ境遇にある水野君や、北川君と暴走したり、ディスコへと逃げていってしまったのです。

効果音 (バイクのエンジン音)

加藤 (モノローグ) さあ、おれも帰るか。

効果音 (バイクの発車音)

加藤 (モノローグ) 青信号、変わるなよ。

効果音 (バイクが急停車、転倒する音。救急車のサイレン)

隣の病人 おはよう。気分はどう？

加藤 あの、ここはどこですか？

隣の病人 病院よ。あんた、ゆうべ、意識不明のまんまで救急車で運び込まれてきたのよ。

加藤 ああ、あ、(思い出す) おれ…。そう、昨日の夜、人をはねてしまったんだ。あ、あの人！

隣の病人 あ、その人、そんなに大したことないって。ここの看護婦さんたちの話してるの聞いたの。

加藤 そうですか…。(モノローグ) それにしても、おれはなんてことをしてしまったんだ。絶望的だ。どうしたらいいんだろう？ どうしたら?!(エコー)

ナレーション 次の日の夜――。

水野 おっ、加藤、お前大丈夫か？ 割に顔色はいいじゃんか。だけどお前、大変なことしてくれたよな。

加藤 ああ。おれ、どうしたらいいのか…。

北川 そうだよな。ヘタしたらおれたちまでヤバいことになる。それでさ、加藤お前、おれたちのこと先生にしゃべらないでくれよな。おれたちまで停学食らうと、就職に響くからな。頼むぜ。お前のこと大丈夫だって。

加藤 そんな…。

北川 じゃもう遅いから。早く元気になってくれよな。さっきのこと、頼むな。

水野 じゃ、また来るからな。

加藤 おい！ 水野、北川、おい！

効果音 (ドアの閉まる音)

加藤(モノローグ) (エコー) 水野、北川。お前ら、お前らなんだって言うんだ。クソ、おれは今までなんていうことをしてきたんだ。もうダメだ。あいつらまでおれを見捨てていきやがった。クソ、あいつら親友面しやがって、いざとなると自分がかわいいのか。あんなやつら頼りにしてきたかと思うと、今までの自分が情けない。もうどうにでもなれ！

ナレーション 加藤君は、自分の親友と思っていた友が、自分を見捨てていってしまうのを見た時、見捨てていった友への怒りより、そんな連中を友として、今まですべてのことから逃げて、狭い世界に我と我が身を閉じ込めてきていた自分を、激しく憎みました。しかし、病院のベッドで、独りっきりの数日間を過ごしているうちに、彼は自分の本当の心を見つめるようになっていたのです。

効果音 (ラジオのチューニング、雑音)

隣の病人 おかしいわね。この辺でいいはずなのに。

加藤 どうしたの？

隣の病人 あのね、わたしの友達でクリスチャンの子がいるんだけど、それで、わたしに、「夜の 9 時半から 10 時半まで、FEBC っていうキリスト教のラジオ放送をやっているから聴いてみてよ」って来るたんびに言うのよ。だからたまには聴いてみようと思ったんだけど。

加藤 へえ。ちょっと貸してみてもよ。幾つ？

1566 キロヘルツよ。

ラジオ音声(女声) (フィルター音) …HLDA、こちらはFEBCラジオ・インターナショナルです。周波数 1566 キロヘルツ、出力 250 キロワットで、大韓民国ソウル・スタジオ、* 送信所から、日本語放送をお送りします。

ラジオ牧師 (フィルター音) “落ちこぼれ”という言葉がこのごろはやっていますね？ 皆さんの学校でも、大学受験のためのレールが敷かれて、その“進学列車”に押し込まれ、揺さぶられ、乗り切れない人たちはいやおうなしに振り落とされていく。いわゆる“落ちこぼれ”てってしまうんですね。

ナレーション 加藤君はハツとして耳をそばだてました。まるで自分のことを言われたような気がしたのです。

ラジオ牧師 (フィルター音) 落ちこぼれた人はどうなるのでしょうか？ 行く先を失ってさまよい歩くか、ヤケになって暴れ回るか。それとも自分自身に見切りをつけて、自らの命を絶っていくのでしょうか？ それでも彼らは、だれにも顧みられないんです。強い人、頭のいい人は、できるだけほかの人を“落ちこぼし”て、生き残っていく。ある意味で、わたしたちの社会全体が、そうなってしまうんです。これは、自分を中心に生きていこうとする人間の、いわば“罪の構図”なんです。

加藤 罪の、構図？

ラジオ牧師 (フィルター音) しかし、わたしはあなたに、ぜひこのことを知っていただきたいのです。イエス様は、99 匹のエリートたちでは満足なせずに、たった 1 匹の、落ちこぼれた、さまよう羊を探し求めて、救いのみ手を差し伸べてくださるのです。今のあなたはいかがですか？ あなたにはこのイエス様が、まことの救い主が必要なのではないのでしょうか？

ナレーション 初めて聴いた基督教の番組でしたが、彼にとっては強烈な印象でした。イエス・キリストが、なぜか今の彼には、まるで目の前にいるように、身近に感じられてきたのです。

加藤(モノローグ) (エコー) 僕は、もう頼るものがない。勉強だって、もうどうやったって追いつかないし、傷が治ったら警察に行かなきゃならない。落ちるとこまで落ちてしまった。けどもし、もし今のラジオの人が言ったことが本当だとしたら、もう一度、もう一度だけやり直しがきくような気がする。イエス様…、イエス様が助けてくれるんなら。

ナレーション それは、祈る言葉さえ知らない彼の、心の底から絞り出したような、魂の叫びでした。そのあとの彼がどうなったか、それはあなたが書き綴ってみてください。でも最後に一言、これだけは言っておきたいんです。神様は、落ちこぼれて、生きる力さえ失って、途方に暮れている者のかすかな声さえも、決してお聞き逃しにはなりません。主は、「わたしは決してあなたを離れず、あなたを捨てない」と言われるのです。なぜなら、“良い羊飼”であられるイエス・キリストは、この落ちこぼれた 1 匹の羊、わたしの、そしてあなたのために命を捨てられたのですから——。

<完>